



軒先には御札がかけられている家をよく目にする。常に折りが生活のかたわらにある。



ひっそりとした路地には、気持ちよさそうにネコがいる。海の町ならではの光景。

## 旧暦を手がかりに潮を待つ 昔も今も変わらない海女漁

コバルトブルーの水面に、蛍光色のピンクや黄、オレンジの磯桶が浮かんでいる。「ハアーツ」「ビューイツ」。静かな波間から、時折響くのは海女の磯笛だ。水面に顔を出した瞬間、思いきり息を吐くのだろう。まるで動物の鳴き声にも聞こえる音色は、神秘的ですらある。

古くは、「魏志倭人伝」や「万葉集」の記録に遡る海女。民族が生き抜くために海や山に出かけ、他の生物の命をいただくというのは、実に根源的な営み。海女は月の満ち欠けから導き出す旧暦を手がかりに、

潮の干満の高低差を把握し、干潮時をめぐって潜る。奇しくも八幡を訪れた2009年7月22日は、日本では46年ぶりの皆既日食の日。いくら文明が発達しようとも、私たちは宇宙をとりまく自然の摂理に抱かれていて、そのことを知識ではなく、日々の仕事の中で身をもって体感しているのが海女ではないだろうか。

ところで志岐の海女は、中国の人がわたらの小崎を訪れ、広めたという説が有力。だから小崎の海女は、昔からずっと志岐の海域はどこでも自由に潜ることができる。ただし防寒にすぐれたウエットスーツを着用せず、薄手の上着やレオタードを重ねて潜るのは、志岐では八幡

だけ。全国でもめずらしいこのスタイルは、長時間潜ることができないため、乱獲を防ぎ、自然を守ることにつながるといって地元漁業全体の方針である。

八幡半島の海女漁は、5月から9月までの5ヵ月間。大潮時は、10時半頃に出発し、17時頃に帰宅。小潮時は7時頃に出発、11時頃に帰宅するのが一般的だ。休みは、祇園さんの

祭りと5月の節句、夏越、7月29日の牛の尻洗い、盆の期間くらい。また毎年漁の始まりと終わりに、無病息災と大漁祈願を祈って、雲丹やアワビを奉納し、寄八幡神社で宮司さんからお祓いを受けるという。昔は、桶いっぱい捕れた。一人3キロで夫婦だったら6キロ、

やはたの海女さんは、芦辺の船着き場から長者原あたりまでを漁場にする。

芦辺港●

志岐

長者原船

志岐空港▲

玄界灘

お金にしたら毎日5〜6万円も稼いでいたそうだが、今は「獲物」の数も買い手も減少傾向にあるのが現状だ。主な売り先は、島内の雲丹屋や海産物屋、または旅館などが中心。最近では、福岡の飲食店経営者が直接浜を訪ねてくることもあるようだが、直取引はそれほど活発ではない。

現在、八幡の海女の数はおよそ80人、うち男性は10人ほど。20年前より人数が少し増えたのは、島外から嫁いできた女性が生活のために海女を習うからだという。

それでは海女の仕事とはどんなものか、実際に漁に同行させてもらった。